

異世界セレブ オメガ  
バース カント ～大  
富豪  $\alpha$  に買われ番にさ  
れる 10の夜～

# 目 次

第一話	魔法商会の総帥 .....	3
第二話	財閥御曹司の契約結婚 .....	32
第三話	出資者のパトロン契約 .....	57
第四話	社交界の夜会で .....	87
第五話	宝飾商の囲い込み .....	119
第六話	カジノの賭け金 .....	145
第七話	美食帝王の品書き .....	176
第八話	大隊商の退屈しのぎ .....	205
第九話	金融王の担保 .....	236
第十話	香水商の工房 .....	269

## 第一話 魔法商会の総帥

「あ……っ、やだ、なに、これ……っ♡」

指が背筋を一筋、辿っただけだった。それだけだ。なのに腰が跳ねて、喉の奥から、聞いたこともない自分の声が押し出される。

「逃げるな。まだ何もしていない」

「し、して……るっ、あんた……じゃない、ジルド、さんっ……手っ、手がっ♡」

燭台の灯りが、ゆらりと壁の宝を舐めた。世界中の財で埋め尽くされた私室。ひやりと冷たい絹の上に、俺は仰向けに転がされていた。抑制剤を呑んだのは、たった一刻前だ。なのに身体の芯が燃えている。腹の奥が、誰かに掻き混ぜてくれと、はしたなく泣いていた。

「呑んだはずなのに、もう濡れているな」

「ちが……っ、それは、あんたの匂いが……っ♡ んっ、嗅がせ、ないでっ……」

没薬と琥珀。低く沈んで、肺の底にまで絡みつく匂い。それを鼻先に吹きかけられるたび、膝の裏が痺れて、勝手に脚が割れていこうとする。一回り大きな身体に組み敷かれて、俺は爪先まで小刻みに震えていた。

「香料を売り歩いていたんだろう。匂いには鼻が利くはずだ。——これは、いい匂いか?」

「い……っ、言わない、っ♡ そんなの、答え……ひあっ♡」

鎖骨を、舌が這う。ぬるりと熱い感触が肌をくだって、胸の尖りで止まった。前歯に軽く挟まれて、声が裏返る。

「乳首だけで、こんなに硬くしているのに」

「やっ、そこ、っ……だめ、舐めちゃ……ふあっ♡ あっ♡ んっ……♡」

(おかしい。胸なんて、ただの飾りだ。男の胸が、こんな……こんなに気持ちいいわけ、ないのに)

ちゅう、と吸い上げられて、腰がびくんと浮いた。同時に、まだ触れられてもいない俺の性器が、先端から透明な雫を一筋零す。それを男は、冷めた目で見下ろしている。値踏みするように。商館の棚に並んだ宝石を眺めるときの、あの金の目で。

「随分と素直な品だ」

「しな、って……っ、僕は、もの、じゃ……ああっ♡♡」

——いや、思い出さなければいけない。どうして俺が、こんな男の寝台で喘がされているのか。

三日前の、嵐の夜から始まったのだ。



「閉店だ。——と言いたいところだが」

雨に打たれて裏口から転がり込んだ俺を、暗がりの声が出迎えた。全身ずぶ濡れ。抱えた行商箱の中で、安物の香料瓶が、からからと心細い音を立てている。

「すみま……っ、雨宿りだけ、すぐ出てくんで……っ」

「出るな」

鼻先を、なにかが掠めた。男の鼻が、ひくりと動いたのが、暗がりでも分かった。

「抑制剤越しても分かる。お前の匂いは、隠せていない」

心臓が止まった。雨が、抑制剤を流したのだ。何年も後生大事に呑み続けてきた、俺をΩだと悟られないための薬を。

「ち、ちが……僕は、ただの、行商人で……っ」

「Ωだな」

反射的に、うなじを庇った。手のひらで覆って、後ずさる。古い傷の刻まれた、その腺を。

「なぜそこを庇う」

燭台が近づいてくる。黒髪に、金の瞳。長身の影が、棚に並ぶ宝物の上にぬるりと伸びて、俺を呑み込もうとした。

そのとき男が、ほんの少しフェロモンを漏らした。

膝が、抜けた。

「ひ……っ、あ……っ」

「立てないか。——これは失礼した」

ふっと圧が消えた。崩れ落ちる寸前で、俺はその場にへたり込む。過呼吸で胸が上下する。視界が滲む。逃げ場のない密室で、心臓の音だけが、ばかみたいに大きく鳴り続けていた。

「せ、世間話、なら……外で……っ」

「悲鳴を上げるな。取って食いはしない。——今夜は」



その男が、大陸一の魔法商会〈ヴァレンス商会〉の総帥、ジルド・ヴァレンスだと知ったのは、毛布にくるまって暖炉の前で温めた葡萄酒を飲まされた後だった。

「抑制剤の予備は」

「……流れました。箱ごと、雨で」

「なら補充がつくまでここにいろ。出ていけば、お前の匂いを嗅ぎつけた他の  $\alpha$  に、その辺の路地裏で食い荒らされるだけだ」

何も問われなかった。うなじのことも、なぜΩだと隠していたのかも。ただ火と、乾いた服と、酒だけが、無言で差し出された。

そして男は、退屈しきっていた。

「どれも飽きた」

世界中の宝で埋まった私室で、男はそう吐き捨てた。金剛石も、遠い国の織物も、しゃべる魔導の人形も。

「集めると、つまらん。手に入った瞬間に、価値が分からなくなる」

「……贅沢な悩みですね」

「そうだな」

否定もしなかった。男は、退屈の底に沈み込んでいた。

三日目の夜。葡萄酒を二杯空けたあとで、男はふいに鼻を寄せてきた。俺の、首筋に。

「お前の匂いの底に、別のαの残り香がこびりついている」



ぞくりとした。背筋ではない。もっと暗くて深い場所が、すうっと冷えた。

「古い。——噛み損ないの匂いだ」

喉の奥から、酸っぱいものが込み上げた。腐った蜜のような、あの匂い。鼻の奥で、勝手に再生される。

「……っ、う……」

「吐くなら桶を出すが」

「いら、ない……っ」

震える唇から、こぼれてしまった。何年も、誰にも言えなかったことが。

「番に……されかけたんです。旅先で。優しいαだと、思ってた」

暖炉の薪が、ぱちりと爆ぜた。

「でも、噛むのを失敗して……腺を、裂いて。そのまま、塞がらなくて。——そいつ、なんて言ったと思います?」

俺は笑った。笑うしかなかった。

「『欠陥品だ』って。捨てて、行きました」

「……」

「だから、もう……誰にも、まともに番ってもらえない身体なんです、僕は。うなじに触られるだけで、あの夜を思い出して、息ができなくなる。だから隠して……Ωだってことも、この傷も、ぜんぶ……」

涙が、葡萄酒の酔いに混じって落ちた。慰めてくれなくていい。哀れなくていい。ただ、笑わないでくれと、それだけを願った。

男は、慰めなかった。

「欠陥品か」

金の瞳が、俺を真っ直ぐに射貫いた。冷たく、それでいて、熱を孕んで。

「——俺が値踏みしてやる。お前の価値は、お前が決めることじゃない」

その言葉は、棘だった。胸の奥に刺さって、抜けなかった。そして同時に、ひどく、体温のあるものだった。



抑制剤が届いた、四日目の夜。